
平均越え

ダウン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平均越え

【Nコード】

N6486V

【作者名】

ダウン

【あらすじ】

隣が女子高校と言う何ともラッキーな男子高校に通う一人の生徒、成績やルックスなどあらゆる事で平均的な青年は、“平均値”と言う不名誉なあだ名をつけられる。本人もそれに甘んじて生活していた。友人である“ぷっちょ”と“逆眼鏡”と共に、今日も学校へと向かう。

序章 始まり

男子校。それは男子だけの聖域と言っている。

秩序が守られていれば、女子がいる共学よりもずっと良い。

何故なら理論的にも女子より男子の方が上と言われているからだ。

しかし、それは男子校でも偏差値の上の学校に限られている。

そう、僕、佐藤 拓哉のいるような男子校は問題外だ。

未だにリーゼントの先輩がいたり、バットを持っている人がいたりする。

そんな中で僕は同級生、先輩からも“平均値”として名が通っている。

友達は2人の同級生、通称“ぶつちょ”と“逆眼鏡”だ。

“ぶつちょ”こと関山 伸幸は高校生にしては太り気味だ。

そして将棋好きと言うなんとも爺くさい……。でもなんだかんだで強いから腹立たしい。

“逆眼鏡”こと笹島 權は勉強より運動が得意な高校生。

眼鏡を掛けているだけで、勉強が出来ないので逆眼鏡だ。アイツも気に入っているらしい。

因みに僕の“平均値”は不名誉なあだ名だ。しかし、聞けば聞くほど納得されてしまう。

勉強、運動、ルックスまでもが平均的と言う事でつけられたあだ名。

僕等のいる男子校、霞男子高校の隣には霞女子高校が存在する。

噂では昔は共学だったらしい。が、男子があまりにも。

まあ、色々な事情で、近辺に高校が2つも存在する。

当然、説明したような男子校ではないので、当然女子には飢えている。

今までの男子校歴史の中で幾多の猛者達が乗り込み、補導されて来た。

僕とぶつちよも入学したの時に牛乳を売りに行かされた事がある。

そんな男子高校生3人と、女子に飢えた男子校の物語。

朝早く、駅から僕、佐藤 拓哉は高校に向かっていた。

どうも不機嫌でなかった。

朝食時から妹、正確には義妹の佐藤 和花に醤油をはねられ、

ワイシャツを取り替えた。それだけなら良かったが、学ランにもは

ねて、

今、そのまま学校へ向かっている。少しだけ臭う。

考えないのが一番、そう思っているでも自分が一番気になる。

今、僕は不機嫌だ。だからこそ、変な事を言うと今は暴力を働きそうだ。

そんな僕にとつてもゆつくりとした口調で話し掛けて来た。

「おおーい。平均君。」

後ろから1人の同高校に通う太めな男子が迫って来ている。

「お前な。今度外にいる時、あだ名で呼んでみる。」

その腹に蹴り入れたるぞ。」

「そ、そんなあー。」

男子高校生は無茶苦茶な提案を本気にするかのようにそつたじろい
でいる。

この男子高校生、彼は“ぷっちょ”こと関山 伸幸。

食べる為に生まれて来たやつとは彼の事だろう。食べる事は最優先だ。

そして将棋好きと言うなんと爺臭い趣味を持っている。

「ぼ、僕のお腹はサンドバックじゃないのぉ。」

「そのくらい僕が不機嫌って事。」

「そ、そうなの。ん？」

ぷっちょはくんとネズミのように鼻を利かせ始めた。

「たたく……。早速やりやがった……。」

僕の不機嫌度を更に上げて行く。そして言うてはならない禁句を口にした。

「ねえ、醤油の匂いしない？」

「ああ、そうだな。」

僕はぷっちょの歩幅、速度の2倍で歩き出す。どうにか暴力は働かずに済みそうだ。

「ちょ、ちよっとぉ。」

ぷっちょは僕の後を走ったり止まったりしながらついて来た。

どうにもこの巨体は運動効率が悪い。止っている時間を走る時間に割り当てれば良い。

そうすればもつと平均的に……。そこで僕は考えるのをやめた。

「全く、ノブは気が利かないな。」

ぷつちよの後ろから1人の眼鏡を掛けた男子高校生が追い抜く。

そして、彼は僕の横に並んだ。彼からは逃げられないので簡単に諦める。

「拓。不機嫌だな。」

「僕からしてみたら權の方がよっぽど気が利いていないよ。」

「そ、そうか？」

彼は同高校の“逆眼鏡”こと笹島 權。眼鏡をつけているが勉強は出来ない。

運動が得意で、眼鏡なので“逆眼鏡”と呼ばれている。

自分でも理解しているらしく、あだ名がついている奴の中では一番気に入っているらしい。

「そうですよ。僕の学ランに妹のこぼした醤油がついているの。」

「へえー。僕なんか妹もないよ。良いなあー、女の子。」

「ノブはバカだな、妹なんてシスコンでロリコンじゃねえかよ。」

「僕は妹に発情なんかしない。」

3人は当然、女子との接点はない。女子と接点を持ちたくないのではなく、持てない。

だから、そんな3人を後ろから静かに見つめる女子高生がいる事には誰も気付かない。

霞男子高校は偏差値もない、ただの男子校。いや、一種のバカ高校だ。

唯一、隣　　と言うが真隣ではない　　女子高があるくらいで特に目立った事は無い。

僕のクラスの中には筋肉バカと呼ばれる上半身裸の生徒や、バナナを食べている生徒、

歴史オタクでちょんまげの生徒と様々だ。

他のクラスにはもつと凄まじい人がいるらしい。見た事が無い、と言っより見たくない。

僕は授業中にも関わらず、外に視線を向けていた。しかし、特に問題はない。

それも周りにまともに授業を受けている人はいないのだから。

ぶつちよはクラスメイトのヤツと将棋を指している。いる奴は要るんだな、一応……。

当然、逆眼鏡は寝ている。流石……。全く勉強をしないな。起きて

いるのを見た事が無い。

紙飛行機が飛び交い、キャッチボールをしている奴等もいる。何とも不思議な光景だ。

ここまで来て不良じゃないから、先生も諦めて、無視状態で授業をしている。

はあゝ。深い溜息をついて、窓の外に視線を逸らす。青空が広がっている。

周りにも窓に双眼鏡を向けているクラスメイトもいる。

目的は解り切っている。窓の向こう側には校庭と女子校が見える。

女子校の校庭には女子達が体育を行っている。原因はそれだけ。

ニヤニヤとした、いやらしい目つきで前の生徒は見ている。

僕としてはそんなにまでしたくない。静かに視線を落とすと、明らかに挙動不審な奴らが。

と、数人の男子生徒が校庭から逃げた。バレバレだ。

僕はあつ、として声を出すと今まで興味なさそうだった奴等が集まって来た。

逃走を図った生徒達は女子校に向かって一目散、走り出した。これが逃走劇だ。

周りの奴等もおおくと声を上げていたが、無駄だろう。

何故なら。

「こらあ！！お前等！！」

男子校から男性教師が4人

僕等は4神と呼ぶ

飛び出して行った。

彼等は元陸上選手で、武道を心得ている。掴まったら最後、だが掴まらない訳がない。

1人は校庭に投げられ、1人は寝技を掛けられて、また1人は……言葉にもしたくない。

そんなこんなで周りの奴等があーと言い終わる前に全員が捕まった。

本当に一瞬の出来事だった。いつもより短いのは拳動不審だったせいだろう。

「やっぱ、駄目だなあ。」

「本当だよ。どうにかあの4人を止めないとな。」

そう周りが言っていると言う事は、何かを計画しているのだろう。無駄な気がする。

昔、その計画で僕とぶつちよは女子校に牛乳を売りに言った事がある。

計画は4人の教師を足止めしている間に十数人が女子校を目指す、
と言うものだった。

しかし、読まれており教師は足止め出来ず、ほぼ全滅した。その中
……。

僕の雰囲気は周りの住人と溶け込んでいて見逃され
。

ぷつちよは囧と思われ、相手にされず
。

2人だけ無事、女子校に到着した。と言ってもどちらも不戦勝の様
なモノだ。

ぷつちよは勇敢にも牛乳を売りに行ったが、僕は校門で待っていた。
しかし、その数分後に2人とも見事にお縄になった。

その時、ふと女子校に目を向けると、体育をしていた女子1人と目
が合った。

その女子の事がどうも昔から頭に残ってしまっている。

今、校庭を走り回っている女子達の中に彼女がいるかもしれない。
そう思うと何故か、真剣に探してしまう。あの娘……いや違うな、
じゃあ……。

しかし、見えるはずも無く、僕はまたしても溜息をつく。

今日もまた授業は誰も聞いていない。先生もその事を理解している。

夕方の帰り道。

ぶつちよと逆眼鏡、そして僕は最寄り駅までの間を共に帰る。

この二人と帰るのには度胸がいるが仕方がない。2人しか友達がい
ないのだから。

結局彼等の後にも数人、猛者達が挑んで散って行った……。

無残な結果に誰もが溜め息を吐いたが、それも束の間のように過ぎ
て行った。

「全く……計画を立てないと駄目だよな。」

「そうだよねえ。」

「って伸幸も櫛も計画に参加したことないだろ。」

「失礼だな、僕は体力専門だから。」

「ぼ、僕だって参加した事あるよ。」

「そうですか。」

と言っても、僕だって参加していると言っただけではない。

一般論を聞く為に平均値の異名を持つ僕が呼ばれているわけだ。

まあご察しの通り全然、嬉しくないが……。

「彼女ほしいなあ。」

ぶつちよにしては珍しい事を言った。どうやら自分の身体が目に入っていないらしい。

僕達は一斉にぶつちよを見た。いや、正確には身体を見た。

「腹をどうにかしてから言え。」

「そつだよ。僕ぐらいルックスが……。おっ？」

逆眼鏡は話を止めて、前の方を見た。何かを見つけたような、そして鼻の下が伸びている。

僕とぶつちよは逆眼鏡の視線を気にしていた。

「ちよ、悪いな。僕は先に行くよ。」

「えっ……なんでだよ。」

「そ、そつだよ。」

僕とぶつちよは逆眼鏡に対して食って掛かった。言葉が丁寧なのが気になる。

それもそのはずだ。目線の先には女子しかいないのだから。

「へへっ。俺、言ってなかったけど幼馴染がいるんだよ。」

「えっ……聞いてねえ。」

「そだよ。何で……。」

「お前達には絶対に教えないよ。」

そう言うつと逆眼鏡は自慢の足で前にいる女子を追いかけて行った。

ただ誰に声を掛ける訳でもなく、それでいて自分の走りを見せつけるように走り去った。

僕とぶつちよは追いかけられないまま、呆然と立ち尽くしていた。

「アイツ……。」

「どうする？他の人に言っちゃう？」

「いや、その内ばれるだろ。アイツ、バカだし。」

「そうだね。」

僕とぶつちよは夕暮れの町を少しずつ歩き出した。

男子校の生徒の目の保養空間はこの街のこの場所だけ。

女子高生がたくさんいて、合法的に見てもなんら問題はない。

「ところで、この間電話したのに、どうして出てくれなかったのさ。」

「

「電話？ああ……。あれ、伸幸だったのか。」

「そうだよ。ってあれ？教えてなかった？」

「ああ。」

じゃあ……とぶつちよは紙を取り出し、僕に渡して来た。

用意の良い奴、と思いながら少し適当な言葉を吐く。

「なんだよ。持っているのかよ。」

「まあね。」

偉そうなぶつちよから紙を受け取り、ポケットにねじ込む。

その後ぶつちよは何か言っていたが、僕は覚えていなかった。

そして、この紙を思い出さなかった事にこれほど後悔、いや……。

これほど感謝する事になろうとは、まだ僕は知らない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6486v/>

平均越え

2011年10月9日13時29分発行